研究報告

ピア・エデュケーション場面の現象分析

大学生と高校生の観察力と伝達力の検証
－活動後の感想に挙げられた内容と映像場面の振り返りから－

加藤千恵子[1)]* 永谷智恵[1)]　石川貴彦[2)]　南山祥子[1)]　佐々木俊子[1)]　渡邊友香[1)]

[1)] 名寄市立大学保健福祉学部看護学科　[2)] 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：ピア・エデュケーション　大学生　高校生　解釈学的現象学

はじめに

平成 29 年度のピア・カウンセリングの活動は、6 月に 4 日間のピア・カウンセラー前期養成講座に始まり、4 校の高校訪問を行い、50 分から 100 分の授業を担当し、最後に、大学 2 年生の 1 クラスにティーチングアシスタントとして 20 分の性感染症の感染の広がりに関する模擬授業を担当し実践した。

参加学生は主にフィールドグループワーク（FGW）と地域との協働Ⅱを選択した学生と、看護研究Ⅱで高校生の性教育に関する評価を研究テーマとした学生、ピア・サークルの学生で構成した。

活動後の評価として、アンケート形式と映像を視聴し、場面分析を試みた。この一連の活動で大学生と高校生や、大学生間で起きている現象を再帰的な姿勢で分析し、相互の学びについて観察力と伝達力に焦点を当て、明確化することを目的とする。

１．方法

１）研究方法；大学生の高校生へのピア活動後の感想の記述と映像場面を振り返る（ピア・カウンセラー養成講座と大学生へのピア場面を除く）。

２）研究対象；全ピア活動に参加した大学生延べ人数 32 人中、高校生へのピア活動に参加した 16 人（1-16 番）。

３）研究場面；4 高校ピア授業の場面で、アンケートに挙がった大学生のピア活動での学び、悩みに該当した部分。

４）分析方法；アンケート調査からピア活動における学び、悩み、ピア活動で感じたこととその理由を分析し、映像場面から、観察力（高校生やピア大学生間における言動、姿勢、表情、高校のクラスの雰囲気など）と伝達力（声の出し方、大きさ、アピールの仕方、パラフレーズによる確認など）を検証する。

５）用語の定義；

（１）再帰的な姿勢：研究者は収集された記述の中に、自分自身が参加していることを自覚しているという姿勢である[1) 2)]。

６）倫理的配慮；アンケートは匿名性、任意性を文書と口頭で説明し、承諾を得てＡ大学倫理委員会の承認を得た。撮影は、高校の許可をもらい、授業前に授業評価をする趣旨を説明し理解を得た。グループ分けやクラスの状況など、クラス担任、依頼された養護教諭と連絡調整を行った。学校管理部門の許可を得ている。

*責任著者　E-mail:chiekok@nayoro.ac.jp

２．結果および考察

１）参加者の背景

表１に大学生の参加学年と参加人数を示した。

高校訪問の条件として、ピア・カウンセラー養成コースで基礎的なコミュニケーションスキルとセクシャリティなどの概要を学んだ者がピア活動に臨んだ。

全アンケートの回収率は、88.9%（32/36）であった。高校訪問におけるアンケート回収率は、93.3%（14/15）であった。

表１　大学生の参加学年と参加人数

	参加学生			計
	大学2年	大学3年	大学4年	
ピアカウンセラー前期養成講座	5 33.3%	7 46.7%	3 20.0%	15 100.0%
A高校	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%	2 100.0%
B高校	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%	2 100.0%
C高校	2 50.0%	0 0.0%	2 50.0%	4 100.0%
D高校	4 57.1%	0 0.0%	3 42.9%	7 100.0%
E大学	1 33.3%	2 66.7%	0 0.0%	3 100.0%

２）ピア活動で感じたこととその理由

アンケートでピア活動について感じたことについて、①面倒、②負担である、③嫌だ、④嬉しい、⑤楽しい、⑥自分の居場所がある、⑦温かい、⑧冷たい、⑨偉そう、⑩不思議、⑪不平等、⑫安心、⑬汚らわしい、⑭誇らしい、⑮自然、⑯孤独のうちで当てはまるものを回答し、その理由を記述してもらった。

①面倒、②負担である、③嫌だ、⑧冷たい、⑨偉そう、⑪不平等、⑬汚らわしい、⑯孤独などの否定的な感じ方と④嬉しい、⑤楽しい、⑥自分の居場所がある、⑦温かい、⑩不思議、⑫安心、⑭誇らしい、⑮自然などの肯定的な感じ方の違いで、ピア活動における観察力と伝達力に影響することが考えられる。以下に、高校別で記載する。

（１）A 高校

2 人の大学生が参加した。高校生をかわいいと感じ、接することで元気をもらったとの感想を持ち、ピア活動で仲間と協働することで自らを振り返り、今までと違う何かを発揮している自分に気づくことができている。

ピア活動が終了したのちに、お見送りや声かけをしてくれた高校生との交流が、楽しさや温かさを感じた要因であると考える。

高校生の考えを聞き、価値観の違いや羞恥心を伴うであろう言葉をきちんと使って高校生がグループワークに参加している姿から、積極性を感じていた（表２参照）。

表２　A 高校に参加した大学生の感じたこととその理由

A高校ピア活動で感じたこと		番号	理由
⑤楽しい	⑦温かい	2	帰り際に、高校生が手を振ってくれてかわいいなと感じた
		2	若い子と接して元気をもらった
⑤楽しい	⑦温かい	10	仲間と意見交換することで、新しい自分に気づける
		10	価値観が広がる
		10	高校生との交流：お見送りをしてくれた
		10	活動後、高校生から話しかけてくれた
		10	セックスなど恥ずかしいと感じるような言葉でも、積極的に発言してくれた

（２）B 高校

2 人の大学生が参加した。高校生との関わりの中で、接することに楽しさを感じている。

自分の高校時代を想起し、高校生にかわいさを感じている。パラフレーズなど、自分が求めるような返しができずに自分の力不足を感じていたが、話す内容に興味関心を示してくれたことで、その高校生の反応が嬉しく、温かい気持ちを感じている（表３参照）。

表３　B 高校に参加した大学生の感じたこととその理由

B高校ピア活動で感じたこと			番号	理由
	⑤楽しい	⑦温かい	2	高校生と関わったり、色々な話を聞くことができて楽しい
			2	高校生の頃を思い出して、生徒がかわいいと感じる
④嬉しい	⑤楽しい	⑦温かい	10	自分の力不足があるにもかかわらず、良い反応を示してくれた時、嬉しい、温かい気持ちになることができる

（3）C 高校

4 人の大学生が参加した。ピアの役割分担は、2 番と 10 番がサポートに回り、14 番 5 番の 2 人が進行役であった。

高校生との関わりで、高校生と 4 歳違うことから若さを感じ、高校生と話せることに楽しさを感じている。

高校に来て、ピア活動をしている自分が伝える立場になっていることに慣れず、楽しさの中に不思議さを感じている。積極的傾聴を行い、思いを共有することで新たな思いを発見し新鮮さを感じている。

妊娠や性感染症について伝える中で、難しく、話しづらいと自覚しながら、まず、伝えられたという達成感と否定されない環境、拍手してもらえたことに驚き、大事にされたという自尊感情を自覚している（表 4 参照）。

表 4　C 高校に参加した大学生の感じたこととその理由

C高校ピア活動で感じたこと						番号	理由
	⑤楽しい		⑦温かい			2	年齢が近いと言っても、4歳以上の差があり、高校生と関われるのは楽しい
						2	看護を学んだ事や年齢を重ねたことで、高校生など思春期に感じるような性に対しての恥ずかしさが減り、ピア仲間という立場では今後もこのような気持ちを理解していたいと思います
						2	高校生はピュアで、かわいくて、関わると気持ちがあたたかくなります
④嬉しい	⑤楽しい		⑦温かい			10	お互いの思いを共有することで新たな思いに気づくことができると考えるから
	⑤楽しい				⑩不思議	14	単純に楽しい
						14	自分が何かを人に伝えている感覚にまだ慣れない
④嬉しい	⑤楽しい	⑥自分の居場所がある	⑦温かい	⑫安心	⑮自然	5	否定されることがない
						5	発表することで否定をされることはないし、拍手をされる
						5	内容は難しかったり、話しづらいことだったりしても、気にせず伝えることができる

（4）D 高校

6 人の大学生が参加した。どのような立場であっても、自分の気持ちが言いやすい雰囲気があることで表現しやすいと感じていたり、高校生との関わる回数が増すことにより、それぞれの価値観に触れることに楽しさ、嬉しさを見出している。C 高校からピア活動を体験した 14 番は 2 回目であるが、活動をしている伝える自分の立場が不思議で実感がわかない不思議な気持ちが継続している。2 番、10 番のサポートを受け、初めてのピア活動に参加した 3 番、7 番は安心感を抱いている（表 5 参照）。

表 5　D 高校に参加した大学生の感じたこととその理由

D高校ピア活動で感じたこと					番号	理由
		⑦温かい			1	どのような立場の人も気持ちを言いやすい
	⑤楽しい	⑦温かい			2	高校生と関わるのが楽しい
	⑤楽しい	⑦温かい		⑫安心	3	否定することがなく、肯定するものが多く、そのおかげで温かさや安心感を得ることができる
				⑫安心	7	未記入
④嬉しい	⑤楽しい	⑦温かい			10	人それぞれの価値観に触れることができる
	⑤楽しい		⑩不思議		14	実感が未だに湧かないから

3）ピア活動における学び

（1）A-D 高校ピア活動の学び

表 6 にピア活動の学びを示した。

大学生は知識を持たない高校生に伝えることの難しさや高校の特色やクラスカラーの違いから、アプローチの仕方（リズム、スピード、声かけなど）を変化させる必要性を感じ、学校の先生の導き方で、高校生の考える力の引き出し方が違う事を学び、自分自身の学習のあり方として、時間配分やパラフレーズに課題があることを実感していた。

同じ内容でクラスごとに臨んでも、反応の違いから理解されているかどうかはお互いの相乗効果の上に学習は成り立つと実感していた。進行役が変わることでクラスの反応や雰囲気が変わることから、影響力があ

ることを実感していた。

表 6　大学生の A-D 高校ピア活動の学び

番号	A高校ピア活動の学び　　コード「3」
2	高校生の声を聞くことができ、感染症や避妊法などまだ正しい知識が十分に広がっていないことを感じた
10	知識のない人に何かを伝えることの難しさ
10	年齢は近いけれど、性に対する考え方が違うということを学んだ
番号	B高校ピア活動の学び　　コード「3」
2	学校や学年、クラスによってカラーが違う
10	学校の特色が出るということを学んだ
10	先生の生徒に対する対応の仕方で、考える力を引き出すことができる
番号	C高校ピア活動の学び　　コード「5」
2	学校それぞれで反応が違い、雰囲気や表情を見ながら進行したり、声をかけることが大切だと感じた
5	高校生がどのように考えたり、感じたりするのかが少し学べました
5	今後の課題として、時間配分、パラフレーズなどのあることがわかりました
10	講師が変わると全体の雰囲気が変わる
14	高校生たちに対して何かを教えるという貴重な体験をして、その難しさと努力の必要性
番号	D高校ピア活動の学び　　コード「6」
1	相手に伝えたいことを伝える難しさや楽しさ
2	高校の先生ともっと連携することで、進行しやすく、学びやすい環境がつくられるのかなと思いました
3	活動してみて伝えたいことが伝わっているのかどうか難しいということを学びました
7	高校生は性について正しい知識を持っていないことがあるということがわかった
10	クラスの雰囲気によって伝え方、スピード、声のかけ方を変えた方がいい
14	高校生の性別、雰囲気によって同じ内容でも差異が生じる

４）ピア活動における悩み

表 7　大学生の A-D 高校ピア活動で生じた悩み

番号	A高校ピア活動での悩み
	なし
番号	B高校ピア活動での悩み
	なし
番号	C高校ピア活動での悩み
14	パラフレーズの熟達
5	声かけ（グループワークに混ざる際など）
番号	D高校ピア活動での悩み
3	グループワークになかなか入っていけなかった
7	話しが聞いてもらえていないときに、そのまま話しをすすめてもよいのかどうか

表 7 は、ピア活動で生じた悩みを示す。A、B 高校ではなかったが、C、D 高校になると初めて参加した大学生が共通して、グループワークにおける声かけや、小集団における進め方に困難を感じるとともに、高校生の考えを確認するためには、パラフレーズの熟達が必須であることを明確に実感していた。話が聞いてもらえないと感じた時に、近くにいる先輩ピアに声かけすることや、新たに参加した者が困っていないか気を配る必要性がある。

高校生は恥ずかしさや学外の若い大学生が来ることにより、通常の授業よりも意識が高揚したり、寡黙になったり、様々な反応を示す。活発で騒がしく、一見聞いていないのではと感じることがある。今回、同時にピア活動の評価として高校生へアンケートをとっているが、騒がしくても、また、反応がなさそうに見えても、確かに高校生は見ていて、聞いている。大学生から知識をもらい、考える支援をしてくれていると自覚し、グループ発表でしっかり発言している。大学生を先輩として、モデル化して学ぶ目線をしっかりと持っている。

高校生は、大学生の衣服、姿勢、髪型、雰囲気を見ている。導入から大学生の自己紹介で話す声のトーンや出身地、ピアネームをしっかり聞き、〇〇ちゃんと声かけをしたりしている。伝えたい内容は、大学生をモデル教材として伝わっているということである。

また、顧問の教員と大学生の関係も見ている。親しげなのか、厳しいのか、何でも答える体制があるのかと読み取る。

私たちはその高校に１年に１度行くだけであるが、高校生への影響は確かにある。その後のフォローも含

め、担当者との連絡調整を密に行い、高校生の動向を踏まえて、少しでも伝わりの良い活動にする必要がある。

初めてピア活動に参加する者は、緊張から高校生のその変化を読み取ることができない場合がある。

ピア活動はチームでしている。困った時はサインを出すなどの打ち合わせを行い、困らないための準備性を整えておく必要があると考える。どのような反応があっても、できるだけ想定内であるように、スキルアップとともに態勢を整えていきたい。

５）高校の映像分析

（１）Ｃ高校

図１は､導入部分を示す。緊張した大学生がピア・カウンセリングで習得した内容の中で、肯定的な表現を意識することで、否定されない場の共有という基盤意識に繋がっている。

大学生は、高校生の「呼んじゃっていいです｣｢ご指名だね」という言動から、授業に対する乗りの良さ、親しみを実感している。

図２は、アンドロギュノス、デートDVの説明と各寸劇が終了し、女の子の悩み、男の子の悩みの〇×クイズが終了した後の解説部分とコミュニケーションゲームの場面である。

緊張していた大学生も少し

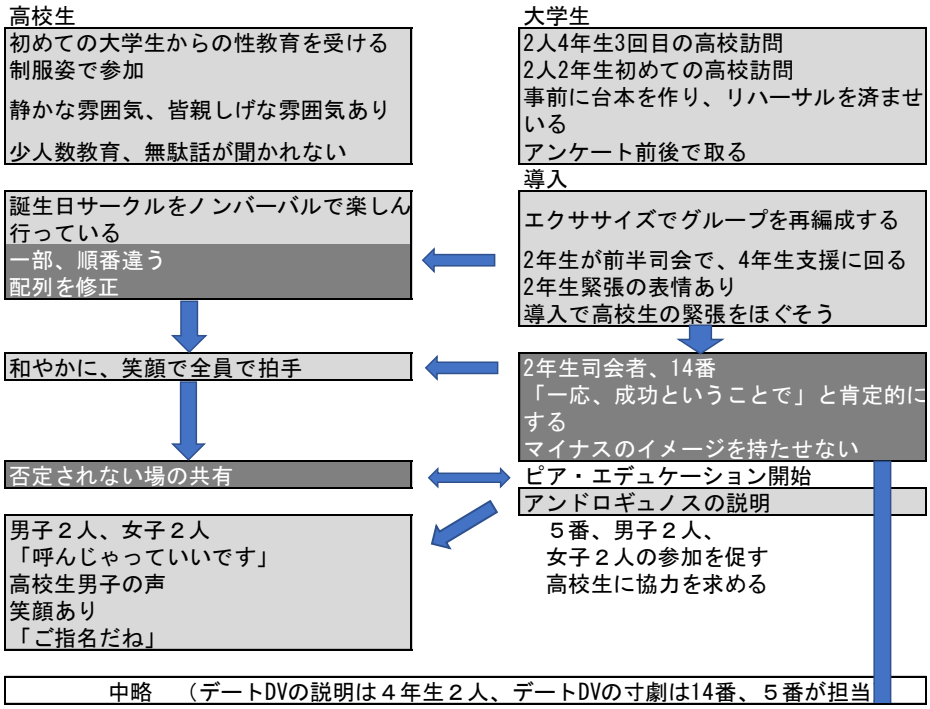

図１　導入部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-C 高校-

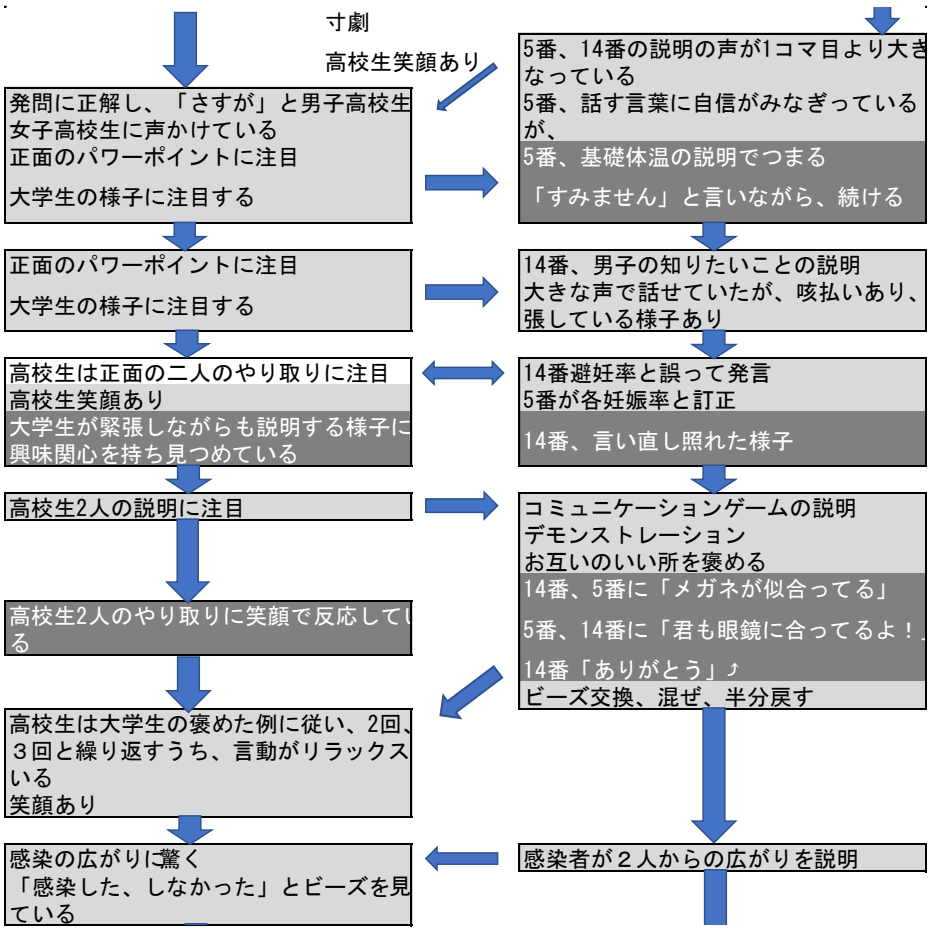

図２　展開部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-C 高校-

場になれ、解説する声も力強くなっているが、詰まる時や言い間違いの場面がある。大学生の一生懸命に正しいことを伝えていこうという姿勢が高校生に伝わっており、詰まることや言い直しは、さらに、高校生の興味関心を引く要因となっている。

コミュニケーションゲームの解説では、14 番が感情をこめて話していることで、高校生は親近感を持ち、好意的な笑顔の反応で返している。大学生は照れながらも、高校生に反応があることで、次に進めやすいと感じている。

高校生が大学生の例を基本として、あいさつし、お互いを褒め合う様子を見ながら、行ったことを手本として、してもらえることに対して 14 番はこの場に立つことに不思議さを感じている。また、感染の広がりについて説明し、感染がこんなにも広がっていくことに高校生が驚く様子に、このコミュニケーションゲームの意図の感染の広がりと、予防しなければこんなにも容易に感染源もわからずに広め続けることを実感してもらえたことから、伝えられたという達成感を感じている。

（２）Ｄ高校

図３は、高校生が寸劇「妊娠しちゃった」を見た後に、妊娠したらどうするか、誰に相談するかを書記と発表者を作り、グループワークで話し合い、発表する。大学生は発表内容を、パラフレーズして、その考えであっているのかを高校生に確認することになる。このパラフレーズ場面で、内容を的確に表せていない自覚が大学生にはあり、高校生の反応も首を傾げているのを見て、十分できていないことを自覚している。しかし、この場を乗り切る必要があり、高校生の笑顔に救われている。

パラフレーズがうまくいくと、「あっそうそう、そんな感じ」のような反応があったり、決まったと感じる間合いが生じる。大学生はこの感覚がないからこそ、うまくできていないと実感したと考える。

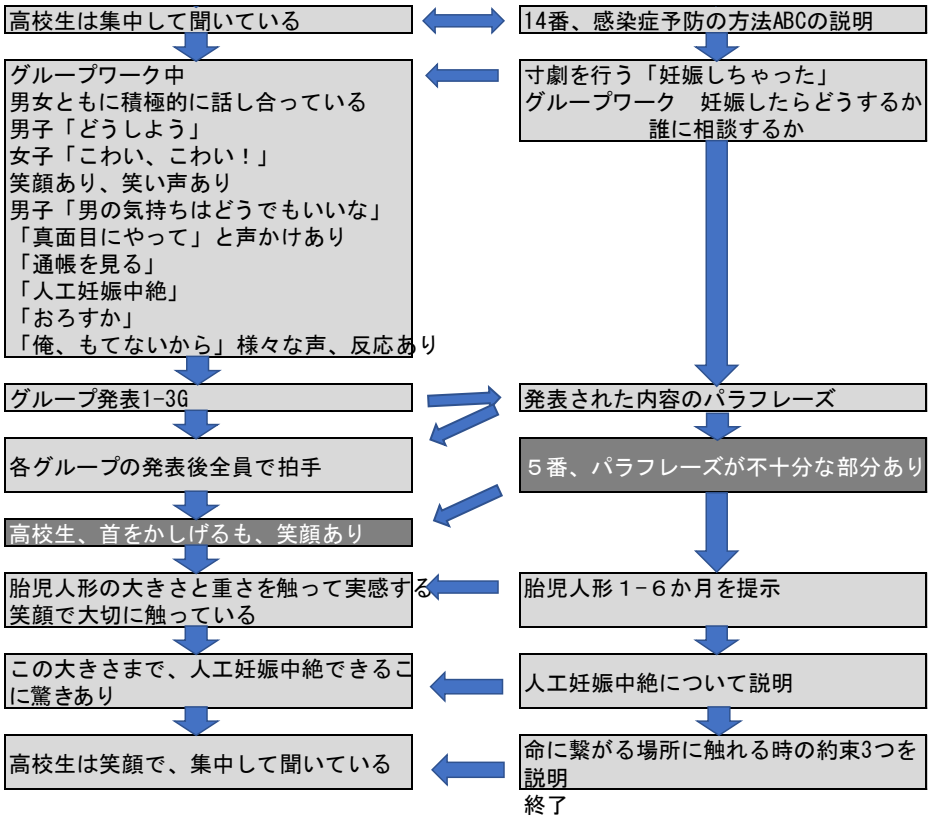

図３　まとめの部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-C 高校-

（2）D 高校

図 4 はD 高校の導入部分である。高校生は学外講師に緊張の様子はなく、日常の状態か、それ以上の高揚状態なのか、騒がしい。担任が注意をしないとならないほどの状態であった。

これに対し、大学生は平常心な感じで淡々と自らの使命を果たそうとしていた。初めて参加の 3 人も落ち着いており、大きな声で話せている。男性の 14 番はこのクラスの活動には特に重要で、同性としての立場で、また、3 回目と回数も踏んだことから余裕が生まれており、初めての者の支援する役割を陰からもしっかりできていた。

10 番は、あまりの騒がしさに、もうそろそろ始まることを、表情を引き締めて、伝えていた。

図 5 は、メンバー紹介、基礎体温、ピル、包茎、避妊法などの説明を行う経過における高校生と大学生の関係を経時的に示した。

高校生は途中、担任に注意を受ける場面があるが、徐々に授業内容に興味関心を示している。聞いている時は、静かに感じる場面もあった。

大学生は、大きな声でしっかり説明できている。注目を集めるために、手を挙げ、アピールする行動もとれている。

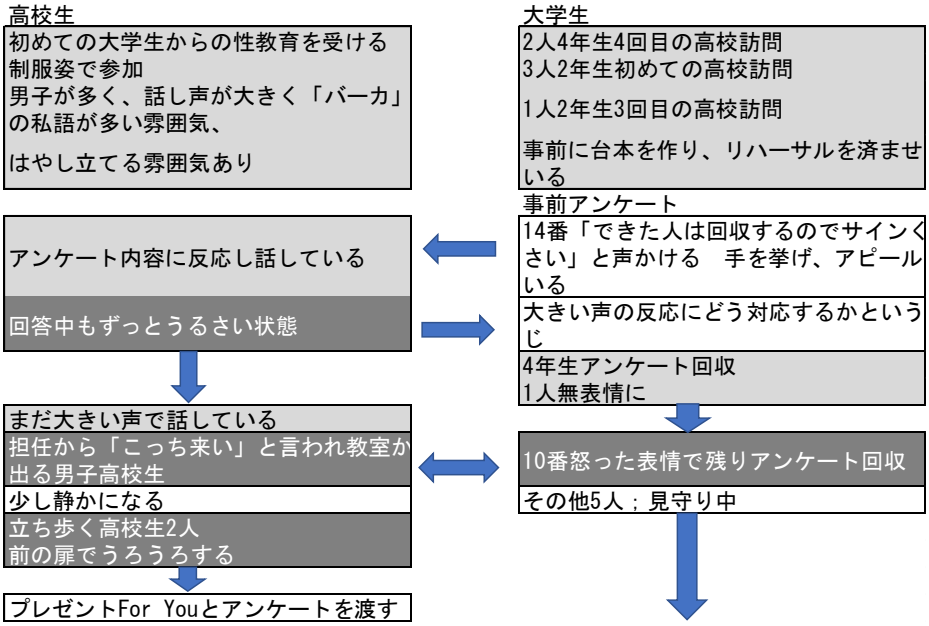

図 4　導入部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-D 高校-

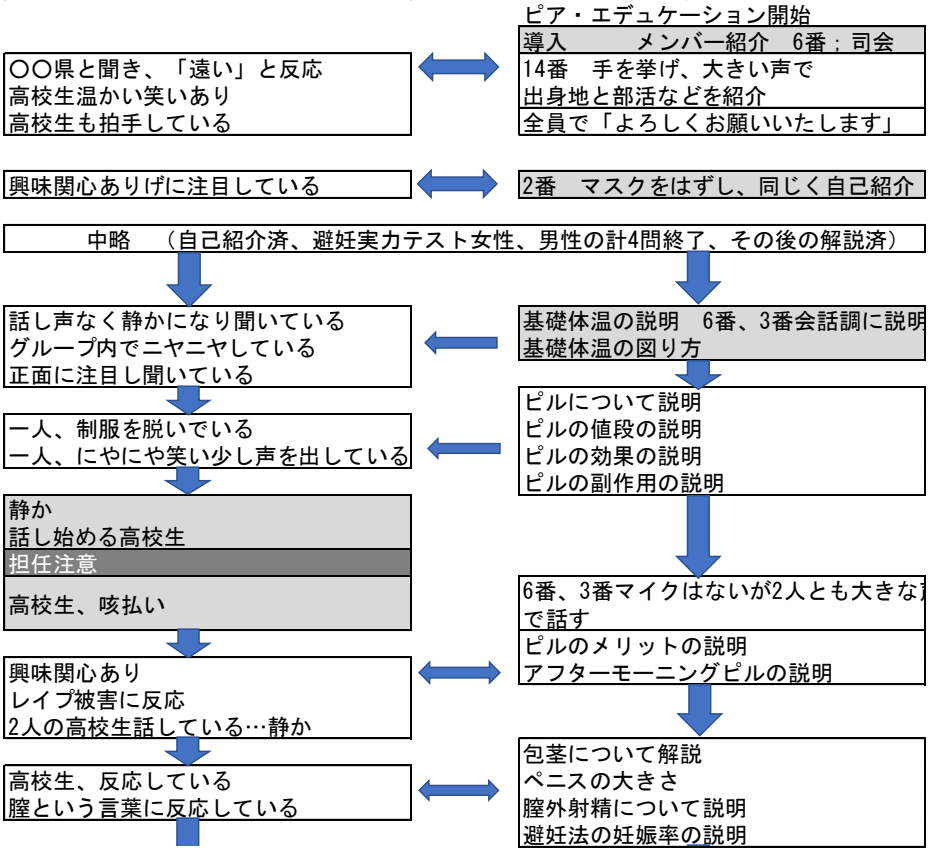

図 5　展開前半部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-D 高校-

図６は、寸劇を見た後のグループワークの場面である。

高校生は、話し合いに対する意欲を見せ、活発に話し合っている。一部、グループを超えた交流もある。

発表の後には、拍手をすることができている。

大学生は、発表者の声の大きさが、周囲の音と比較すると小さく聞き取りづらい場合でも、顔を見て、真剣に聞いているよというサインを伝え、話しやすい発問をするなど工夫することができていた。

支援に回る大学生は初めて関わる大学生が参加しやすいように各グループに誘導することができていた。

図７は、コミュニケーションゲームと感染の予防に関する場面である。

高校生は、大学生の会話調のやり取りに注目し、コミュニケーションゲームに参画し、1 グループのゲームに参加していない３人に対して、同級生が交換しようと声かけ、座ったままでも、ビーズを交換している様子が認められた。集中力が出てきたのか、正面を比較的見ており、静かな雰囲気になり、反応も的確に返ってきている。

大学生は、大きな声で説明ができ、感染の広がりの確認ができている。アンケートでは、感想もあると嬉しいという意思表示を表現できている。はじめ、活動が成り立つのだろうかと思い不安もあったと思うが、表情からは一切不安感は認められなかった。はじめて

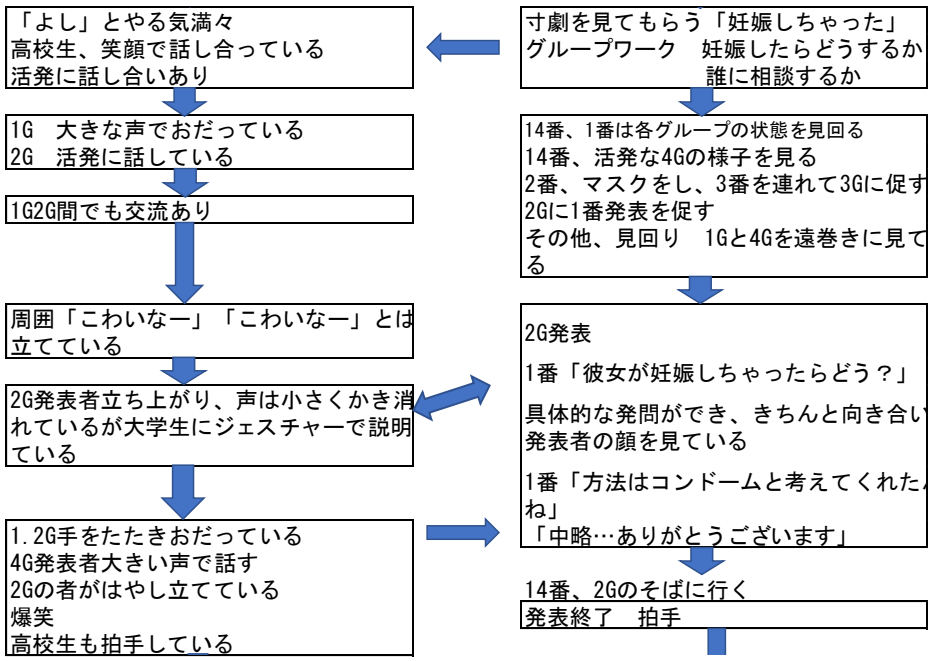

図６　展開後半部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-D 高校-

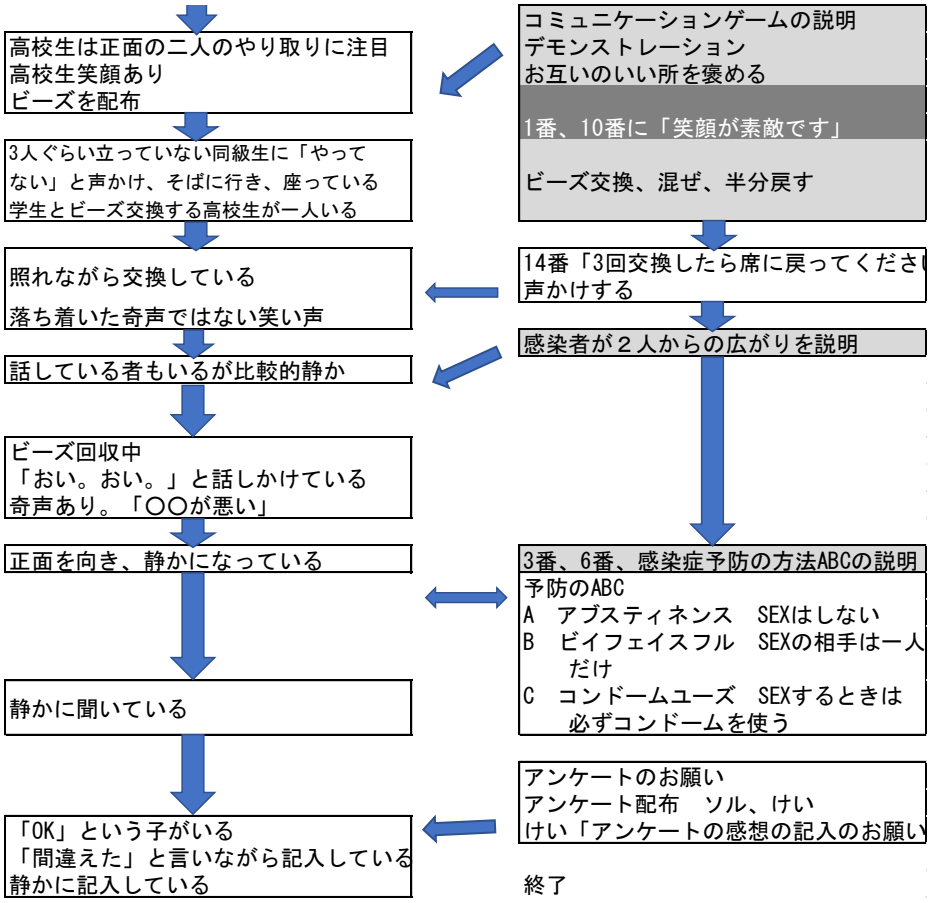

図７　まとめの部分における本質観取（現象学的解釈）のプロセス-D 高校-

の参加の場合、台本通りの棒読みの部分も一部にあるが、大きな声で表現している様子から、一生懸命さや興味関心のある内容から、高校生も徐々に態度の変容に繋がったものと考えられる。

相互の関係性が一つの活動の伝わりに影響することが考えられる。

大学生と出会った高校生は、大学生の言動、衣服などの目に見えた部分から、努力して臨んでいる活動姿勢からモデルとして、本来の学びの内容だけでなく、隠れたカリキュラム内容が印象深く残り、学びと結び付けている。

大学生は、各高校の特色やクラスの特徴などを男女比や地域性から感じている。大学生自身の高校時代を振り返り、自分が先輩としてできることは何かと年下の者に対して「かわいい」という意識を持ち、心の余裕を持ち、対応していた。

高校生が少し活発すぎて、高揚していたとしても、教室内を歩き、奇声を発し、担任に注意されている場面に遭遇しても、大学生は自身の高校時代を振り返ることで、想定内の出来事として対応することができていた。

台本を読み、練習して臨んだこの活動で「詰まること」や「間違え、言い直しすること」は、自己課題となっており、「パラフレーズができること」と「グループワークにおいて自ら声かけること」について課題があった。

３．　結語

１）　大学生は知識を持たない高校生に伝えることの難しさや高校の特色やクラスカラーの違いから、アプローチの仕方（リズム、スピード、声かけなど）を変化させる必要性を理解した。進行役が変わることでクラスの反応や雰囲気が変わることから、影響力があることを実感していた。

２）　学校の先生の導き方で、高校生の考える力の引き出し方が違う事を学び、自分自身の学習の課題として時間配分やパラフレーズにあることがわかった。

３）　同じ内容でクラスごとに臨んでも、反応の違いから理解しているかはお互いの相乗効果の上に学習は成り立つことがわかった。

４）高校生は、大学生の着ているもの、姿勢、髪型、雰囲気を観察し、自己紹介で話す声のトーンや出身地、ピアネームをしっかり聞いていることから、伝えたい内容は、大学生をモデルとして伝わっている。

５）　ピア活動の初学者には、パラフレーズとグループワーク、小集団の進め方を強化し、困った時に対処法を講じ、想定内でピア活動を進める必要がある。

引用文献

１）Ellis, C.(1995).Final negotiations :A story of love, and chronic illness. Philadelphia: Temple University Press.

２）Marlene Zichi Cohen,David L. Kahn, Richard H. Steeves.(2005)解釈学的現象学による看護研究:大久保功子訳、日本看護協会出版会、ｐ128

参考文献

１）田中美恵子（2010）看護研究の方法論としての解釈的現象学-教育講演-聖路加看護学会誌、Vol.14 No.1、ｐ44-48